

これまで何度かこの人を取り上げたが、今回も書かずにはいられない。首相安倍晋三氏である。

時計の針を十年前に戻そう。二〇〇七年七月、第一次安倍政権は参院選に臨んだ。

「消えた年金」や閣僚の失言、政治とカネ、強引な国会運営で逆風を浴びていた。

首相は、当時の小沢一郎民主党との戦いで「安倍か小沢か」「改革か逆行か」と有権者に選択を迫った。結果は、自民党が改選議席の六四を大きく割り込む三七議席の大惨敗だった。

国民から事実上の不信任を突きつけられたのに、首相は「責任は私にある」が「改革を続行していくことが私の仕事」と続投した。

独善的な政権運営に加え、主権者の審判にまで目をつむる姿に「この人に考えを改めさせるのは不可能なことではないか」とさえ思った。ほどなく病気を理由に辞めたが、気が付けば、また表舞台で思うがままに振る舞っている。

安倍首相の退陣に端を発した政治の混乱期のこと。政局や選挙の動向に鋭い観察眼を持つ自民党本部のベテラン職員から聞いた言葉が記憶に残っている。「日本の政治は『政治学』では読み解けないよ。『心理学』で考えるべきだ」

政治の動きを捉えるには、それを規定し

強弁の心理学

ている法律や制度、あるいは統計的な分析では足りない。アクターである政治家、特に首相の人間性に焦点を当てておくべきだ。そう解釈すると妙に納得した。

現安倍政権は「共謀罪」法を参院委員会の採決を省いて成立させた。「森友」「加計」両学園問題で、政権が公正公平であるべき行政をゆがめたのではないかとという重大な疑いが残っているのに、七月二日投票の東京都議選への悪影響を懸念して国会を閉じた。審議でも、首相は野党の追及を「印象操作だ」とはねつけ、まともに答えなかった。批判を受け入れられない心理とはいかなるものなのだろう。

他人の声に耳を傾けない人は「自信がない人」なのだと精神科医片岡珠美氏はいう。「他人の意見を少しでも聞くと揺れ動くせいか、言いにくくめられてしまうのではないかと、言いなりになってしまうのではないか」という不安や恐怖を抱いている（「他人の意見を聞かない人」角川新書）

そういえば、安倍氏と身近に接する人が安倍氏のことを「温厚」「気配りの人」などと評するのをよく聞く。元々は柔和で、気も強くないのかもしれない。「安倍三代」（朝日新聞出版）で青木理氏は、学生時代の安倍氏が学業は可もなく不可もなくだったものの「仲間うちでは優しく人がよく要領もいとおぼつちやま」だったと書いてい

る。周囲も安倍氏に対し政治への関心を感じたことはなかった。

片田、青木両氏の本を手がかりに空想すると、首相のパーソナリティーについてこんな仮説が浮かぶ。

「素直な」安倍氏は政治家になる過程で、「保守思想」に感化され、持論を押し通すことだけを「決断力」だと勘違いした。ただ、真摯な内省を経ていなかったため、本当は自身の考えに確信が持っていない。だから反対意見が、自らの存在を揺るがす恐れの種類になる――。

重ねて言うが、あくまで勝手な想像だ。しかし「優しい」人物が批判にムキになり、強弁を繰り返すことへの一つの説明にはなる。

そういう人物にどう対処すべきか。片田氏は「周囲が事実の誤認の指摘をして独りよがりの解釈を訂正しようとすると、むしろ意固地になり、被害妄想を抱いて攻撃的になることさえある。他人の意見を聞けない人なのだ」と割り切って対応するのが賢明」という。

国政の最高責任者の「誤り」を国民が割り切ることはできるだろうか。雌伏を経て再登板した首相は、支持率を下げない危機管理の技術以外、本質的には以前と何も変わっていない。それを学ぶために、国民が民主主義の損失を被っているのなら、授業料は法外だ。

△聖▽